

薬専から医大へ

長崎薬専は面白い学校であつた。薬屋の息子が割に多く皆のんびりしていた。私もその一人で、薬剤師の免状さえ貰えればよい位のつもりでいたから、赤点を沢山とつたのである。一年

の二学期は落第が嫌なので大分勉強したが、襖一枚隔てた部屋のNさんという二年生はサツパリ勉強しなかった。夜遅く酒を飲んで帰って来て、「松山君、良く頑張つて勉強するね」と言つてサツサと布団を敷いて寝てしまふ。

二学期末の試験の時、何か音がして「ここが試験に出るぞ」とページをめくりながら、印をつけている気配がする。そして「まだ、多すぎるなあ」と呟き、また、音をさせて「ここが試験に出る」と口に出している。私は「Nさん、何をしておられるのですか」と尋ねたら「試験のヤマをかけているんだ」との返事で、聞いてみると、五〇銭銅貨を右手で少し高く放り上げ、左手背にうけ表が出たら試験に出る、裏が出たら試験に出ないと占つているとのことであつた。翌朝、食事の時「もし山が外れたらどうするんですか」と私が尋ねたら「あんなにして山をかけて外れたらあきらめがつくよ」と言つた。

Nさんと同じクラスに久留米の戦車隊に三カ月くらい召集されて帰つてきたZさんという人がいた。本当なら出席日数不足で落第するところであるが、Nさんを含めた二年生の有志が教授の家を回つて「お国のためにご奉公をして来たZさんを落第させては困る」と頼み、その甲斐あつてかZさんは進級した。進級の席次を見たNさんはZさんより成績が下で「危なかつたのは俺の方だった、もう人の世話なんかするもんじやない」と言い、卒業勉強に備えて下宿を變つてしまつた。

当時三年生にDさんという愉快な人がいた。私はラグビー部に入らされていたので、彼と一緒に合宿したことがある。助教授の話になって「T助教授はおとなしくて、怒らないなあ」と誰かが言ったら、Dは「怒るぞ」と言う。Dの話ではT助教授の時は、身体はT助教授の方に向けてはいたが、後ろの席の者と授業中ズーツと将棋を指していたそう。助教授も怒らないし、いちいち後ろを向いて将棋をするのも面倒なので、始めから机を後ろに向け、助教授への敬礼が済み、授業が始まるとともに後ろの席の者と将棋を指したら「出て行け」と怒鳴られたという。さもありませんと私は思う。

Dは毎朝学校に出かける時「今日は『キング』を持って行こうか『富士』にしようか『講談倶楽部』はどうか」と迷うのだそうである。全然、勉強する意志はないようであった。私も一度、下宿に遊びに行ったことがあるが、リング箱一個と『キング』のような雑誌が約十五冊と、鴨居にセルの着物がぶら下がっているだけであった。教科書は古本屋に売り、「この本を買ったのも何かの縁と思うので、俺の下宿に遊びに来てくれ」と書いた紙が挟んであったと、その教科書を買った者が言っていた。Dは彼の父に「時節柄、私達も阿蘇の裾野において軍事教練で大演習をすることになりましたので十円お送りください」と手紙を出し、「金を親父から巻き上げるのは、時局を利用するに限るなあ」と話していたが、親父さんが興信所を使ってDの行状を全部調べ上げ「何月何日、お前は諏訪神社の前で女と会っただろう」などと言われ、グ

ウの音も出なかったこともあったと言っていた。

一年上にIという人がいたが、同級生の話では、大勢の下宿人の中ではIが一番早く起きて寝ている者を皆起こして回る癖があるのに、彼の成績はパツとせず低空飛行であつたらしい。机の引き出しには倉庫につけるような大きな鍵を付け、そのまま引き出しを引っ張つたら三センチメートルくらい引き出しが開くので「何のためにつけている鍵かわからないなあ」と同級生が私達の下宿に来たとき、話し合っていた。壁には黒板が掛けられ「映画、人情紙風船、十月十日より、電気館にて」と書いてあり、授業に関することは、何一つ記録されいかなかったと言つて大笑いしていた。このNもDもIも皆、葉屋の息子であつた。

私は二年に進級してからは、先ず落第の心配がないので、友達と遊び暮らした。ビリヤードに凝つて、ほとんど毎日のように出掛けた。腕はサツパリ上達しなかつた。金が無くなり、教科書を次々古本屋に売つてビリヤード代にした。三年に進級してどこかの会社に就職しようと思つたが、(母は私が葉専一年の二学期の時に死亡し、店は人に貸していた)葉学の知識はほとんど無かつた。大学受験も兼ねて勉強しようという氣になつたのは、三年の一学期も終わる頃であつた。二年の時、大学入学試験問題集というのをラグビーで鹿児島に遠征した時、買つたので、それを土台にして勉強をした。勉強をし始めると、段々欲が出て是非入学してやろうという氣になつた。短期間に試験勉強をするには要領よくしなければならぬと思ひ、いろ

いろ知恵を絞った。

先ず、物理学であるが、医学に関係のある問題が出るとにらんで、電気と光とレントゲンをマスターした。

資格試験は、どれだけのことを勉強しているか、ということを試験するのであるが、(例えば、医師国家試験など)、入学試験は、一定の人数の枠内に収まるように受験者を振り落とす試験である。資格試験は、必要な知識を知っていればパスするが、入学試験は、人の知らないことを知っていて、人より一点でも多く取らなければパスしない。電気では電池の列連結と行連結が試験に出るとヤマを掛けて覚えた。列連結、行連結という言葉は、抵抗器にも蓄電器にもあるが、全然解答の式が異なる。先ず、受験生を振るい分けるのには、もってこいの問題である。案の定、出題された。

生物学の試験は、葉専の一年先輩の本を借りて勉強した。生物学という学科は葉専の教科書にはない。全くの独学であった。「再生」という現象が問題に出ると思ったら、これも二次試験で出て助かった。ドイツ語には全く手を焼いた。葉専のドイツ語の先生(私達はドイツチャンとあだ名で呼んでいた)が、一年生の時は嫌というほど、アイネル、アイネス、アイネム、アイネンやデル、デス、デム、デンなどドイツ語の文法で私達を鍛えた。前の時間に教えて、翌日、スラスラ言えない者は「出て行け」といって教室から追い出した。教室の半分より後ろの

者は「お前達の親父はノーバイや、ノーバイとは脳梅毒のことだ。親父の悪口を言われて悔しかったら勉強してこい」と言つて追い出した。二年になったらドイツ語の時間は雑談ばかりして、時々、ドイツ語を教えてくれるようになった。私はどうしたわけか、かわいがられて、どんなにアイウエオ順（薬專の二年の時から出席簿がアイウエオ順に替わつた）に順番にドイツ語を訳すように当てられていても、私だけは絶対に訳すように言われなかつた。ワから順番に後ろから当てられて来ても、私だけははずされた。試験は出来ても出来なくても六〇点はくれた。私はドイツ語の勉強はしないで遊んだ。

ところが、医科大学の入学試験にはドイツ語があるのである。化学、物理、数学、生物、英語の勉強に時間を取られて、ドイツ語を勉強する暇がない。入学試験の一ヶ月前から、寝る前三〇分くらい小説を読んでいた時間をドイツ語の勉強に当てることにした。本は「ドイツ語ABCから」という名前であつたような気がする。医大に入りたい一心で、一ヶ月の間に四回読んだ。その頃は、日支事變の最中で、私も兵隊に行かなければならないような雰囲気であつた。兵役は国民の義務であるから、徴兵検査に合格したら行かねばならないのは当然とは思つていたが、何時までも兵隊でいて殴られるのは嫌であつた。医大に入ることは、軍医将校に一步近づぐことであり、それは殴られる回数が減ることも意味していた。励まざるべけんやである。

一生懸命になると恐ろしいもので、ドイツ語の本を四回目に読む時は、最初の一行を読んだ

だけで最後まで全部訳すことが出来た。なかの単語の意味も分からずに訳し得た。これでは勉強にならないと思つているうちに、試験日がやつてきた。どうにでもなれと、いささか破れかぶれの気持ちでドイツ語の試験を受けたら、*グアインフルス*という単語が分からず、文の前後から「影響」と訳したら、その通りであつて、ドイツ語の試験はパスした。化学はお手の物と思つていたら「ヨウドメトリーについて述べよ」という問題が出て、還元のためにヨウドを反応さすのか、酸化のために入れるのかわからない。それでヨウドをくつつけて、と答案を濁して置いた。医大には巧く合格出来た。入学後、ドイツチャンに会つたので「お陰様で、大学に入学出来ました」とお礼を言つたら、「君は随分遊ばせてやったからなあ」と言われた。遊ばされたため、大学に入って教授を悩ませた。病理の教授が「私達は高等学校の時、ドイツ語が出来ない、とよくドイツ語の先生に叱られました。君たちはもつと出来ません。大体ドイツ語というのは、名詞は大文字で書くものですよ」と嘆かわしそうに話された。張本人は私であつた。しかし、エールリツヒも名詞は小文字で書いたこともあるそうだから、余り気に病むほどのことでもない。